

- 同年同省令第九十二號船燈信號器救命具取締規則
- 同三十四年內務省令第三十一號人工甘味質取締規則
- 同年同省令第三十九號「ベスト」菌取扱取締規則
- 同年陸軍省令第四號臺灣寄留者演習召集規定
- 同年農商務省令第七號狩獵法施行規則
- 同年同省令第八號漁業組合規則
- 同年同省令十五號商業會議所議員選舉規則
- 同年遞信省令第三十六號電氣事業取締規則
- 同年同省令第三十九號火藥類船舶運送及貯藏規程
- 同三十六年內務省令第二號官國幣社以下神社並寺院佛堂境內官有地木竹管理規則
- 同年同省令第五號痘苗及ヒ血精其ノ他細菌學的豫防治療品製造取締規則
- 同年同省令第十號飲食物防腐劑取締規則

- 同年農商務省令第四號畜牛結核病豫防法施行規則
- 同三十七年內務省令第一號肺結核豫防ニ關スル件
- 同年大藏省令第十九號煙草專賣法施行細則
- 同三十八年內務省令第二十二號神佛參拜其ノ他ノ代理周旋行為取締ノ件
- 同年農商務省令第五號輸出羽二重取締規則
- 同年同省令第七號蠶病豫防法施行規則
- 同年同省令第十七號蠶業法施行細則
- 同年同省令第十九號蠶業警察規則
- 同年遞信省令第二十號船舶職員法施行細則
- 同三十九年內務省令第十六號屠場法施行規則
- 同年同省令第二十二號北海道移住民規則
- 同年同省令第二十七號醫師法施行規則
- 同年同省令第二十八號齒科醫師法施行規則

豫算上ニ於ケル歲入ノ編制 歲入ノ基因

- 同年農商務省令第十一號獸疫檢疫規則
- 同年同省令第十四號輸出羽二重精練業法施行規則
- 同四十年外務省令第一號外國旅券規則
- 同年同省令第三號移民保護法施行細則
- 同年內務省令第二十一號案内業者取締規則
- 同年同省令第二十七號藥品營業並ニ藥品取扱ニ依ル命令
- 同年同省令第二十八號藥劑師藥種商製藥者藥局方ニ記載セサル藥品製劑製造輸入發賣方ノ件
- 同年農商務省令第十七號種牡牛檢查法施行規則
- 同年同省令第二十一號森林法施行規則
- 同年遞信省令第二十四號船鑑札規則
- 同年同省令第三十五號第三種郵便物認可規則
- 同年同省令第五十五號特別高壓電線路取締規則

- 同四十一年內務省令第十五號市町村ニ於テ民勢調査ニ關スル件
- 同年同省令第十六號警察犯處罰令
- 同年農商務省令第十七號肥料取締法施行規則
- 同四十二年內務省令第十九號病院醫院其ノ他診察所治療所ノ廣告ニ關スル件
- 同年同省令第二十號懸賞又ハ富籤類似其ノ他取締ノ件
- 同年大藏省令第二十七號煙草賣捌規則
- 同年陸軍省令第十二號馬匹調査及ヒ檢查施行規則
- 同年農商務省令第三號漁船トロール漁業取締規則
- 同年同省令第二十六號砂鐵法施行細則
- 同年同省令第二十八號度量衡法施行細則
- 同年同省令第二十九號遠洋漁業獎勵法施行細則
- 同年同省令第四十一號鯨漁取締規則

總算上ニ於ケル輸入ノ總額 輸入ノ基因

同年同省令第五十六號瀬戸内海ニ於ケル漁業網禁止ノ件

同年同省令第五十九號工場統計報告規則

同年遞信省令第十一號收入印紙賣捌規則

同年同省令第六十五號遞信省徽章、通信日附印及ヒ郵便切手類模造取締規則

同四十二年農商務省令第三號道府縣聯合共進會規則

同年同省令第二十五號漁業法施行規則

第三項 辨償及ヒ違約金

明治二十二年法律第四號會計法

同二十三年法律第二十九號民事訴訟法

同年法律第六十四號民事訴訟費用法

同年法律第九十六號刑事訴訟法

同二十九年法律第六十九號海員懲戒法

同三十年法律第二十一號國稅徵收法

同三十一年法律第十三號人事訴訟手續法

同年法律第十四號非訟事件手續法

同三十二年法律第十九號海港檢疫法

同年法律第六十八號外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法

同年法律第九十五號水難救護法

同年法律第一百五號要塞地帶法

同三十三年法律第六十七號間接國稅犯則者處分法

同年法律第八十四號行政執行法

同三十八年法律第四十號遠洋漁業獎勵法

同四十年法律第四十五號刑法

同四十一年法律第二十九號刑法施行法

同十九年四月勅令無號亞米利加合衆國犯罪人引渡條約

同二十二年勅令第六十號會計規則

- 同年勅令第六十四號物品會計規則
- 同二十三年勅令第六十四號海軍兵備品會計規則
- 同三十一年勅令第二十七號衛戍病院條例
- 同年勅令第四十七號海軍糧食條例
- 同年勅令第三百三十二號看守給與品及ヒ貸與品規則
- 同年十月勅令無號日清難破船救助費用償還約定
- 同三十三年勅令第二百五十三號行政執行法施行令
- 同三十五年勅令第三百三十五號國稅徵收法施行規則
- 同年勅令第二百十二號北海道土功組合法施行令
- 同三十七年勅令第六號海軍給與令
- 同三十年大藏省令第十號國稅徵收法施行細則
- 同年遞信省令第六號船舶檢查法施行細則
- 同三十三年外務省令第三號領事官ノ徵收スル手續料及ヒ出張費用ニ關ス

ル規程

- 同年海軍省令第七號軍港港要規則
- 同三十五年農商務省令第二號馬匹去勢術練習生規則
- 同三十六年外務省令第一號外務省留學生規程
- 同年陸軍省令第三號陸地測量部修技所生徒募集規則
- 同年農商務省令第十號度量衡法施行細則
- 同三十七年海軍省令第三十一號海軍給與令施行細則
- 同四十年內務省令第十三號海港檢疫法施行規則
- 同十七年太政官達第五十七號官吏職務上裁判所ニ出頭シタルトキ旅費日當請求ノ件
- 同二十二年文部省訓令第四號尋常師範學校生徒ニ係ル學資償還ノ件
- 同四十一年遞信省訓令第三號水難救護法ニ依リ外國政府ヨリノ償還金處

運方ノ件

豫算上ニ於ケル輸入ノ編制 輸入ノ基因

- 同二十九年同省告示第三號物品購買賣却規則
- 同三十一年農商務省告示第十二號遠洋漁業練習生規程
- 同三十二年遞信省告示第九十三號東京郵便電信學校規則
- 同三十四年海軍省告示第四號採炭事業請負規則
- 同三十六年內務省告示第五十九號爆發物貯庫規定
- 同三十七年陸軍省告示第十三號軍馬預託規則
- 同四十一年海軍省告示第二號海軍工事請負規則
- 同四十二年文部省告示第二百五十四號小學校教科用圖書翻刻發行ニ關スル規程
- 同年遞信省告示第千百五十五號遞信官吏練習所規則
- 同年同省告示第千二百五十六號商船學校規則
- 同十二年內務省達乙第十五號日英難破船費用償還約定
- 同十四年同省達乙第四十五號日米難破船費用償還約定

- 同二十二年海軍省達第二百一號患者費用規則
- 同二十九年同省達第八十八號被服經理規程
- 同三十二年陸軍省達第三十號衛戍病院條例第七條ノ定額規則
- 同二十年遞信省公達第百號集配人服務規則
- 同二十一年同省公達第百三十一號三等郵便局長三等電信局長服務規則
- 同三十二年同省公達第百一十一號東京郵便電信學校通信科規則
- 同年同省公達第五百五十九號東京郵便電信學校貸費償納規程
- 同三十三年同省公達第四百七十六號遞送人服務規則
- 同三十八年同省公達第四百二十九號通信官吏練習所練習生修業費用償納規程
- 同四十年同省公達第三百十七號遞送集配受負規程
- 同四十二年同省公達第七百四十七號通信官署現業員制服規程
- 同年同省公達第七百四十九號通信官署傭人制服規程

同四十三年同省公達
同年同省公達第六百
同年同省公達第八百
同十年三月神奈川縣
同十六年四月同縣甲
同十九年七月帝國大
同三十七年四月(官報

第四項 稅關雜收入

明治三十年法律第十
同三十二年法律第六
同年勅令第三百十九
同年勅令第三百二十
同三十三年勅令第百

同三十一年律令第一
同三十年大藏省令第
同三十四年同省令第
同三十五年同省令第
料ノ件
同三十七年同省令第
營業等ニ關スル特
同四十一年同省令第
同四十二年同省令第
同年同省令第五號
同年同省令第六號
同年同省令第七號
同年同省令第八號

豫算上ニ於ケル歳入

第七節 直間税説ノ缺點

之ニ反シテ、直税及ヒ間税ノ區別ヲ否トスル理由ハ左ノ如シ。

(い) 多クノ租税ニ在リテハ、其ノ負擔ハ果シテ轉嫁セラルルモノナルヤ、將タ轉嫁セラレサルモノナルヤ、當ニ立法上ノミナラス、理論上明ラカナラサル場合尠カラス。蓋シ立法者ハ租税ヲ制定スルニ際シ、豫メ其ノ轉嫁スヘキモノタルト、轉嫁スヘカクサルモノタルトノ判議ヲ下シ、依リテ以テ間税及ヒ直税ノ別ヲ設クルナランモ、其ノ實際ニ於テハ、彼等ノ豫期ニ反スルコト多シ。例ヘハ營業税ノ如キ、擔税者ハ常ニ果シテ納税者ヲ兼スルモノナリヤ、否ヤ、又小作地ノ地租ハ、其ノ所有者カ納税者及ヒ擔税者ヲ兼スルモノナリヤ、否ヤ、時ト場合トニ由リ、二者共ニ容易ニ判断シ難キカ如シ。況ンヤ、取引所税ノ如キ、其ノ賦課徴收ノ方法ヲ定ムルニ當テ、豫メ何人カ納税者タリ、又何人カ擔税者タラサルヘカラサルカヲ定ムル一定ノ理由若クハ標準ナキニ於テヲヤ、抑、取引所税

ヲ納ムル者ハ必ラス株式ヲ賣ル人タルヘシトカ、或ハ買フ人クルヘシトカ、常ニ定マリタル理由ナシ。又擔税者ニ付テモ同様ニシテ、株ヲ賣ル者カ擔税者タルモ、乃至買フ者カ擔税者タルモ何レニテモ可ナリ。何トナレハ株式ノ取引ニ付テハ賣者カ利益ヲ收ムヘキカ、買者カ利益ヲ收ムヘキカハ一概ニ断定スヘカラサレハナリ。畢竟取引所税ノ如キハ、株式等ノ賣買者ノ内其ノ何レニ課スヘキヤ、之ヲ定ムルニ確タル標準ヲ見出スコト容易ナラス。去レハ立法者ノ意ハ果シテ其ノ轉嫁時期スルニ在ルカ、又ハ之ヲ期セサルニ在ルカ、是レ亦容易ニ断定スルコト能ハサルナリ。又地租ニ付テハ從來何人モ其ノ直税タルヲ疑フ者ナカルヘシ。然ルニ日清戰役後我邦ニ於テ地租増徴ノ事アルヤ、新タニ増徴スル地租ハ地主ノ負擔トナラスシテ小作人ノ負擔ト爲ルヲ主張セシモノアリキ。其ノ説ニ曰ク、地租増加スレハ、夫レタケ地主ハ小作料ヲ引上クヘシト、此事タルヤ、理論上有リ得ヘカラサルカ如キモ、實際場合ニ依リテハ斯クノ如キ結果ヲ生セリ。而シテ其ノ實例ハ殊ニ宅地租ニ於テ之ヲ見ル。蓋シ宅地租ニ

シテ上ランカ其ノ地主ハ屋賃ヲ上タルニ騰騰スルコトナシ故ニ地租ノ一種
タル宅地租ハ其ノ所有者ヨリ賃借者ニ轉嫁セラルルコト爲ルヘシ之ヲ要
スルニ直税關稅ハ租稅制定ノ際立法者カ其ノ轉嫁セラルルヘキト然ラサルト
ニ由テ之ヲ區別スルニ關セス實際ニ於テハ前述ノ如ク其ノ區別頗ル曖昧タ
ルヲ免レヌ。

(六) 是レヲ以テ負擔ノ歸着點ニ付テ直税關稅ノ別ヲ存スルハ元ト租稅ノ
固有ノ性質ニ基クニアラスシテ一時ノ出來事ニ依ルト言フモ不可ナルナシ。
故ニ租稅中時トシテハ直税トナリ時トシテハ間稅トナリ又時トシテハ半ハ
直税ニシテ半ハ間稅タルモノアリ畢竟其ノ轉嫁ノ有無及ヒ程度ニ依リテ變
化スルヲ免レヌ例ヘハ酒造稅ノ如キ若シ增稅後酒ノ價格ニシテ其ノ增徴セ
ラレタル增額タケ騰貴センカ酒造家ハ其ノ一度納付セシ租稅金額ヲ回復ス
ルコトヲ得ヘシ之ニ反シテ酒ノ價格ニシテ依然舊ノ如クナランカ其ノ納付
セル租稅ハ自ラ之ヲ負擔セサルヲ得ヌ又新タニ賦課セラレ若クハ增徴セラ

レタル租稅ノ半額タケ酒價ニシテ騰貴シタリトセンカ其ノ租稅ノ半ハ納稅
者自ラ之ヲ負擔シ半ハ消費者又ハ購買者ニ轉嫁スルコトヲ得ヘシ現ニ明治
三十四年十月酒造稅ノ増シテ一石十五圓ト爲ルヤ當時酒ノ價ハ酒造家ノ思
惑ニ相違シ舞州池田伊丹地方ノ酒造家ハ一石ニ付キ二圓三十錢程ノ負擔ヲ
爲ササルヲ得サリシト云フ此等ノ場合ヲ通觀スルニ第一ノ場合ハ間稅第二
ノ場合ハ直稅第三ノ場合ハ半ハ間稅ニシテ半ハ直稅ナリ斯クノ如ク變動常
ナキ一時ノ出來事ヲ以テ租稅ノ分類ヲ爲スハ殆ント不可能ノ事ニ屬ス換言
スレハ一ノ租稅ハ其ノ必ラス直稅タリ間稅タルコトヲ斷定シ難ク其ノ物件
ノ價格ノ高低ニ因テ或ハ直稅トナリ或ハ間稅トナルヘシ。

(は) 凡ソ直稅ハ擔稅者ニヨリテ納付セラレ間稅ハ納稅者ニ依リテ納付セ
ラルルトノ事實ハ必スシモ其ノ特徴ニアラス蓋シ所得稅ノ直稅ナルコトハ
何人モ之ヲ疑ハサル所ナリ然ルニ英國ノ所得稅及ヒ我國ノ所得稅ノ一部分
ハ擔稅者ニ依リテ納付セラレヌ納稅者ニ依テ納付セラルルヲ見ル是レニ由

テ觀レハ本邦及ヒ英國ノ所得稅ハ擔稅者及ヒ納稅者其ノ人ヲ異ニスルヲ以テ勢ヒ間接稅ト謂ハサルヲ得サルヘシ例ヘハ我國ノ第二種ノ所得ニ就テ見ルニ公債證書等ノ所有者ハ之ニ對シテ所得稅ヲ課セラルルモ其ノ租稅ハ自ラ之ヲ納メス日本銀行ハ其ノ利子ヲ拂ヒ渡ストキ其ノ所得稅タケ引去リ而シテ實際上日本銀行ハ此等ノ所得ニ課セル所得稅ノ納稅者タル地位ニ立ツモノトス此ノ場合ニ取テハ所得稅ハ自ラ間稅ナリトノ結論ヲ生スヘシ是レ實ニ明白ナル誤謬ナリ故ニ納稅者及ヒ擔稅者其ノ人ヲ同フスルヲ直稅トシ之ヲ異ニスルヲ間稅トスルノ說ハ兩者ノ區別ヲ說明シ得タリト云フヘカラス。

(E) 直稅及ヒ間稅ノ別ハ以テ負擔ノ輕重ヲ分ツ所以ナリトハ論者ノ說ナルモ其ノ實負擔ノ輕重ハ直稅又ハ間稅タルカ爲メニアラスシテ他ニ存スルヲ見ル抑間稅ハ直稅ト異ナリ擔稅者ハ己レノ便宜ト認ムル時期及ヒ稅額ヲ擇ヒ以テ隨意ニ負擔スルヲ得ルモノナリ例ヘハ酒稅ノ擔稅者ハ飲酒ヲ欲ス

ル時又ハ之ヲ購買スル資金アル時ニ之ヲ負擔スルノミナラス自ラ其ノ負擔額ヲ撰定スルノ自由ヲ有ス且ヤ其ノ之ヲ負擔スルトセサルトハ一ニ擔稅者ノ考ニ依テ定マルコト多シ是レ租稅ニ付テ頗ル注目スヘキ點ニシテ同一ノ租稅ニ在リテモ其自己ニ都合好キ時ニ負擔スルト都合ノ惡キ時ニ負擔スルトハ苦痛ノ大小深淺ハ同日ノ談ニアラス彼ノ酒稅ノ如キハ前述ノ如ク擔稅者ノ自由意思ニ依リテ負擔スルカ故ニ彼等ニ取テ頗ル便利ナリ是レヲ以テ縱令ヒ其ノ負擔ハ重クトモ之ヲ感スルノ念ハ薄カルヘシサレハ間稅ノ反對少キハ其ノ之ヲ間接ニ負擔スルカ爲メニ非スシテ自ラ擔稅者カ擔稅額及ヒ擔稅ノ時期ヲ決定スルノ自由アルニ依ル之ニ反シ直稅ヲ重シト云フハ納稅者又ハ擔稅者ノ之ヲ欲スルト欲セサルト間ハス法律ノ定ムル所ニ依テ一概ニ負擔セサルヘカラサルニ依ルヤ明カナリ夫レ地租ハ一年六期ヲ畫シ必ス法律ノ定メタル時期ニ猶豫ナク其ノ負擔スヘキ稅額ヲ納付セサルヘカラス而シテ縱令ヒ不作ニシテ租稅ニ充ツヘキ收穫ナキモ其ノ納稅期ニ於テ之

ニ後ルルコトヲ許ササルナリ、以テ見ルヘシ、負擔ノ輕重ハ必シモ直接ニ負擔
スルト間接ニ負擔スルトニ依ルニ非スシテ他ニ存スルコトヲ、

以上説ク所ニ依リテ從來ノ直税及ヒ間税説ノ長短ヲ比較スルニ、其ノ缺ハ
專ヨ長所ニ比シテ多キカ知シ、マシテヤ、實際上從來ノ解釋ニ從フコト能ハサ
ル場合ヲ生スルヲ以テ、各國ノ租税制度上唯其ノ名ヲ存シテ其實ヲ變シタル
例尠カラズ、夫ノ相續税ノ如キ、若シ負擔ノ歸着點ニ付テ之ヲ論スレハ直税タ
ルコト論ナキモ、尙ホ之ヲ以テ直接國税ト看做ササルヲ見レハ、既ニ名實相合
ハサルコトヲ知ルニ足ラン、若シ相續税ヲシテ直接國税タラサラシメントセ
ハ、從來ノ解釋ニ從フコト能ハサルナリ、果シテ然ラハ、如何ナル説明ニ由テ之
ヲ解釋スルヲ得ヘキカ、是レ予輩ノ將ニ説明セントスル所ナリ、

第八節 臺帳税及ヒ從率税説

念フニ相續税ハ、相續ノ開始ト共ニ相續者カ納付シ、負擔スルハ當然ノコト

ニシテ、相續者ハ納税者ニシテ又兼テ擔税者タリ、決シテ被相續者カ擔税者
ニシテ相續者カ納税者ナリト云フコトヲ得ス、然ルニ諸國ノ租税制度上ハ相
續税ヲ以テ直税ト看做サスシテ多クハ間税トスルカ故ニ此上ノ解釋ニ從フ
トキハ自ラ納税者ト擔税者トヲ分タサルヘカラサルコトトナルヘシ、然ルニ
論理上之ヲ分ツノ困難ナルハ前述ノ如シ、是レ則チ從來ノ解釋カ最早租税制
度上其ノ意味ヲ失ヘル確證ニアラスシテ何ソヤ、然ラハ如何ニシテ之ヲ解釋
スヘキヤト云フニ、予輩ハ直税及ヒ間税ニ代フルニ臺帳税及ヒ從率税ノ區別
ヲ以テセントス、各國ノ租税制度上ニ於ケル直税及ヒ間税ハ多ク此ノ意味ニ
從フヲ見ル、此ノ解釋タルヤ、佛蘭西ヲ以テ其ノ始トシ、他ノ諸國ニテモ亦之ヲ
採用セル例少カラス、唯名稱ノミハ從前ノ儘ヲ襲用セルノミ、

抑、臺帳税トハ、所謂資産税又ハ財産税、地租、營業税、所得税、資本利子税、家屋税
等ヲ含ム、而シテ資産タリ、所得タリ、將タ收益タルトヲ問ハス、苟クモ其ノ税源
又ハ租税ノ客體トナルモノハ常ニ永續的性質、又ハ關係ヲ帯フルモノトス、例

へハ土地家屋等ハ雷ニ一收税期間又ハ租税ノ賦課徴收セララル場合ニ存在シ若クハ現出スルニ止マラスシテ、數年又ハ數十年ノ久シキニ亘リテ存續スルモノナリ。是レヲ以テ租税ノ客體主體ハ言フ迄モナク、苟クモ課税ノ標準及ヒ條件ト爲ルヘキ事實ヲ調査シ且之ヲ確メ得ルヲ以テ、豫メ納税者、納税期及ヒ税額ヲ定ムルコトヲ得、一度之ヲ定メタル以上ハ、永ク之ヲ基礎トシテ以テ賦課徴收スルコトヲ得ヘシ。是レ則チ臺帳税ノ特色ニシテ、此等ノ事實ハ豫メ租税臺帳ニ登録シ置クヲ便トスルカ故ニ其等ノ租税ハ云ハハ臺帳ヲ基礎トシテ收納スルニ利アリ、臺帳税ノ名稱ハ茲ニ胚胎ス。既ニ一度ヒ臺帳ヲ調製セル以上ハ之ヲ基トシテ徵税令書ヲ發スレハ、則チ直ニ收納スルコトヲ得ヘシ。故ニ徵税ノ手續モ亦甚タ簡便ニシテ屢々容體ヲ調査スルノ要ナク、又納税者或ハ擔税者モ隱匿スルノ機會ナシ。是ヲ以テ臺帳税ノ賦課徴收ハ單リ我國ノミナラス、各國共ニ地方自治團體ニ委任スルヲ常トス。尤モ租税ニ依リテハ往々例外アレトモ、原則トシテハ之ヲ委任セリ。元來地方團體ノ吏員ハ特ニ租税

ニ關スル智識ト經驗ナキハ勿論ナレトモ、臺帳税ハ臺帳ヲ基礎トスルモノナルカ故ニ手續上別段ニ煩雜ナル手續ヲ要セス、從テ彼等ヲシテ徵税事務ヲ取扱ハシムルモ何等ノ不都合ヲ見ス以テ知ルヘシ。直税及ヒ間税ノ區別ハ自ラ徵税及ヒ課税ノ方法ニマテ影響ヲ及ホスコトヲ、詳言スレハ所謂直税茲ニ謂フ臺帳税ハ其ノ賦課徴收ニ關スル特別ノ經驗アル收税官吏ヲ要セス、又特別ノ收税機關ヲ要セサルナリ。

從率税トハ、之ニ反シテ經濟上一時ノ出來事例ヘハ生産、賣買、輸出入、消費、相續、株券債券ノ發行ト云ヘルカ如キ事實ヲ捉ヘテ、以テ課税ノ目的物ニ供スル租税ヲ云フ。故ニ其ノ客體ハ臺帳税ノ如ク永ク存續セスシテ、其ノ事終レハ再ヒ見ルコト能ハサル事實多シ。從テ豫メ納税者又ハ租税ノ主體ヲ定ムルコト能ハサルノミナラス、課税ノ標準トスヘキ事件ノ範圍又ハ現出ノ時期等ニ至テハ始ト豫知スルコト能ハサルナリ。例ヘハ關税ノ如キ當局者ハ、何人カ何時ニ如何ナル種類ノ貨物ヲ幾許輸出又ハ輸入スヘキヤヲ豫測スルコト能ハネ

從テ豫メ關稅ノ納稅者、稅額及ヒ納期ヲ定ムルコト能ハサルナリ、故ニ從率稅ニ在リテハ當局者ハ常ニ生産、輸出、賣買、相續等ノ如キ事件ノ起ルヤ否ヤニ注意シ、而シテ其ノ一度現出スルヤ直ニ漏ス所ナク之ヲ捉ヘテ以テ課稅ノ目的物ニ供スヘシ、サレハ此等ノ租稅ニ在リテ豫メ規定シ得ヘキハ稅率ノミ、主體、客體、納稅期、稅額等ニ至リテハ、課稅ノ目的物タル如上ノ事件ノ發生シタル後、始メテ之ヲ豫メ得ルノミ、關稅ノ如キハ即チ其ノ一適例ニシテ、政府ハ豫メ關稅定率表ヲ定メ置キ、輸出入ナル出來事ノ起ルヤ、直チニ之ヲ適用ス、是レ則チ從率稅ノ稱アル所以ナリ、是レヲ以テ從率稅ハ其ノ性質上特別ノ經驗又ハ素養アル收稅官吏ヲ要シ、從テ特別ノ收稅機關ヲ必要トス、何トナレハ豫メ其ノ主體客體ハ勿論稅額納期ノ定マラサルヲ以テナリ、現ニ關稅ノ賦課徵收ニ關シテハ警察權ヲ帶ヘル稅關吏ヲ任スルニ徵シテ明ナリ、故ニ彼等ハ常ニ注意シテ將ニ來ルヘキ出來事ヲ監視セサルヘカラス、此ノ如ク時々ノ出來事ヲ捉ヘテ課稅スルハ是レ從率稅ノ特色ニシテ、賦課同稅ノ神髓ト云フヘシ、是ヲ

以テ相續稅ノ如キハ、前述セル通常ノ解釋ニ從ヘハ直稅ナリト云フノ外ナキモ、以上ノ解釋ニ從ヘハ相續稅ハ明ニ從率稅又ハ間稅ニシテ、恰モ各國ノ現行租稅制度ノ規定ト符合スルヲ見ルナリ、

第十七章 租税ノ大原則

第一節 所謂租税ノ四大原則ノ由來

凡ソ租税制度ヲ制定セントセハ、必ラスヤ各種ノ租税ニ付テ採擇鹽梅スル所ナカルヘカラス、然レトモ其ノ選擇ハ偶然不用意ニ出ツルモノニアラス、又立法者一時ノ出來心ニ依ルモノニアラス、一定ノ主義方針ノ力範疇ヲナスアルハ言フヲ竣タス、若シモ偶然ノ出來事ナリトセハ、學者政治家ニシテ誰レカ之カ爲メニ苦心スル者アラシヤ、是ヲ以テ、從來租税ヲ批判選擇スル標準トシテ、所謂租税ノ大原則ヲ説ク者アリ、念フニ租税ノ大原則タルヤ、あだむ、すみす、引ノ一度之ヲ唱道セシ以來大ニ學者政治家ノ注意ヲ惹キ起シタルノミナラス、十九世紀ノ前半ニ於テハ其ノ各國ノ立法上ニ及ホシタル影響尠カラサルナリ。

あだむ、すみすノ所謂租税ノ四大原則トハ他ナシ、第一平等ノ原則]The canon

of equality. 第二確實ノ原則]... certainty. 第三便利ノ原則]... convenience. 第四

「最少經費ノ原則」... the least expence. ノ總稱ナリ。

先ツ平等ノ原則ニ依ルニ、租税ハ國民カ其ノ保護ヲ受クル財産及ヒ所得ニ比例シテ平等ナラサルヘカラス、第二確實ノ原則ニ依ルニ、租税ハ納税者ニ取リテ確實ナルヲ要ス、故ニ屢變更スルカ如キ租税ハ不可ナリ、第三便利ノ原則ニ依レハ、租税ハ納税者ニ取リテ其ノ納付上便利ナルヲ要ス、縱令ヒ同一種類ノ租税ト雖モ收納ノ時期方法ニ由リテ大ニ其ノ輕重ノ差ヲ生スルモノナリ、第四最少經費ノ原則ニ從ヘハ、租税ハ其ノ徵收費ノ最少ナキヲ要ス、若シ租税ノ方法煩瑣ナルカ、將タ其ノ人心ニ逆フコト著シケレハ、其ノ得ル所ハ却テ失フ所ヲ償フコト能ハサルヘシ、以上ハ是レ所謂四大原則ノ要領ナリ。

此ノあだむ、すみすノ四大原則タルヤ、一時ハ金科玉條トシテ學者及ヒ政治家ノ遵奉スル所ト爲リ、更ニ之レヲ批難スルノ聲ヲ聞カサリキ、然ルニ十九世紀ノ中頃ヨリシテ、學者中之ニ向ツテ往々疑ヲ挿ム者ヲ生スルニ至レリ、何ト

ナレハ、以上ノ四大原則ニシテ果シテ文字通りニ解釋セラレ其ノ儘ニ實行セラルルトキハ、實際上大ナル不便ヲ生スルヲ以テナリ、ラゼーカー言ヘルアリ、曰ク、あだむすみすノ四大原則タル若シ文字通りニ解釋センカ、其ノ一ツタモ殆ント實行スルコト難ハサルナリト、去レハ其ノ聲ノ大ナルニ似ス、實際ニ於ケル影響ハ却テ少カリシカ如シ、之ヲ事實ニ徴シテ其ノ眞價ヲ批評スルハ左迄無用ノ業ニアラサルヘシ、今左ニ其ノ概要ヲ述ヘン哉。

第二節 第一ノ原則ノ批評

あだむすみす曰ク、租税ハ平等ナラサルヘカラスト、此ノ原則タルヤ、一見洵ニ非難スヘキ所ナキニ似タリ、然レトモ一步ヲ進メテ氏ノ説明スル所ニ依テ考フルトキハ直チニ其ノ不都合ナルヲ發見スヘシ、氏ノ意蓋シ租税ノ平等トハ他ノ意味ニアラス、納税者カ政府ニ對シテ納付スルモノハ、須ラク其ノ財産及レ所得ニ比例スヘシト云フニ在リ、勿論租税ハ無標準ニ賦課徵收スルコト

能ハス、其ノ標準トシテ納税者ノ財産或ハ所得ノ金額ヲ以テ、之ニ充ツルハ別ニ不都合ナシ、然レトモあだむすみすノ眞意ノ在ル所ヲ付度スルニ、氏ハ租税ノ根柢ヲ以テ納税者カ國家ヨリ保護セラルル財産又ハ所得ニ比例スヘシト云フニ似タリ、臣民タル者カ政府ノ保護ヲ受クルハ勿論事實ナリ、併シナカラ其ノ保護ヲ受クルカ爲メニ納税ノ義務ヲ生スルカ如ク説クハ如何ノモノニヤ、保護ヲ受クルカ故ニ納税ノ義務ヲ生ストセハ、租税ハ取りモ直チス身體財産ノ保護料タラン、即チ其ノ保護ニ對スル報酬ト爲ルヘシ、更ニ之ヲ尋釋スレハ、ラゼーノ社會契約説ニ基クモノト見ルヘク、ラゼーノ學説カ誤レルト同シク、あだむすみすノ平等説モ先ツ此ノ點ニ於テ誤ラサルヲ得サルヘシ、次ニ氏ハ財産又ハ所得ニ比例スルヲ以テ租税ノ平等ナリト解釋スルモ、然ラハ租税ハ常ニ財産及ヒ所得ニ比例スヘキモノナリヤト云フニ、之ヲ學理ニ徴シ實際ニ徴スルニ、必スシモ然リト云フヲ得サルナリ、其ノ故ニ何ソヤ、予輩試ミニ之ヲ説カン、彼ノ累進稅説ハ近來一般ニ認メラレ、殆ント之ヲ疑フノ餘地ナキ

ハ恰カモ以上ノ説ニ齟齬スルモノニ非サルカ。又實際ニ就テ之ヲ觀ルモ、累進稅ハあだむすみすノ租稅ノ平等ノ原則以外ニ於テ、別ニ原則トシテ或ル種ノ租稅ノ上ニ行ハルルヲ見ル、要スルニ氏ノ説ハ、理論上且實際上兩ナカラ通セサル所アルハ必シモ予輩ノ強辯ノミニアラサルナリ。

第三節 第二ノ原則ノ批評

第二ノ原則ニ曰ク、租稅ハ成ルヘク確實ナルヲ要ス、是ヲ以テ終始變動スル所アルカ如キ租稅ハ不可ナリト。此ノ説タルヤ、一應尤モナリト雖モ、其ノ實際則トシテ現今之ヲ遵奉スルノ價值アリヤ否ヤ、疑ナキ能ハサルナリ、成ル程あだむすみすノ頃マテハ、多少之ヲ以テ原則トシテ主張スルノ必要アリシナラシ。殊ニ封建時代或ハ君主擅制ノ國家ニ於テ、國王若クハ權臣宰相ノ意思カ即テ法律ト爲リシ時代ニ於テ然リトス、例ハ帝王、大臣宰相ノミナラス、其ノ配下ノ當局者マテカ自家ノ意思ニ依リテ租稅ヲ増加シ或ハ變更シタル時ニ當

リテヤ、原則トシテ租稅ノ確實ヲ説クノ必要ナルハ古今東西ノ歴史ノ證明スル所ナリ、然ルニ一旦法治國ト爲リ立憲政體ノ確立スルニ及ンテヤ、此ノ原則ハ其用ヲ失フニ至レリ。例ハ帝國憲法第六十二條ニモ、新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ定ムヘシト規定シ、收稅官吏或ハ財政當局者ノ意見ニ從テ之ヲ變更スルノ餘地ヲ存セス。納稅者ハ常ニ明カニ法律ノ規定ニ依リテ租稅ヲ納付シ且負擔スルモノナリ。故ニ租稅ニシテ確實ナラサル租稅ナシ、假ニ一步ヲ讓リテあだむすみすノ真意ノ在ル所ヲ付度スルトキハ大略左ノ如クナランカ、曰ク、凡ソ納稅者タル者ハ皆多少ノ資本ヲ有シテ以テ、各種ノ事業ヲ經營シツツアリ、而シテ其ノ資本ヲ放下シテ以テ事業ヲ始ムルニ方テヤ、必スヤ損益ノ勘定上租稅ノ負擔ヲ計算スヘシ。此ノ計算ヲ基トシ、一旦事業ヲ開始シタル後突然從來ノ租稅ヲ増加シ若クハ或ハ新ニ課稅セラレルコトアラシニハ、之カ爲メ最初ノ計畫ハ全然齟齬スヘク、到底國民ノ產業ヲ妨害セズンハ止マサルヘシト、以上ノ理由ニ依リテ氏ハ豫メ租稅ヲ確定シ賜メテ變

更スヘカラスト云フナラン。若シ夫レ特ニ産業ノ保護或ハ經濟ノ發展上ヨリ觀ルトキハ、無論課税ニ由リテ以テ之ヲ妨害スルノ不可ナルヤ言フ俟タス。然レトモ之ヲ事物ノ實際ニ徴スルトキハ、シカク簡易ナル問題ニアラス。例ヘハ我國ノ如キハ、明治維新以來幾度カ租税ヲ變更シ、又幾度カ新シキ租税ヲ設ケタルコト殆ント枚擧ニ追ナシ。加之方今各國間ノ競争日ニ益々劇甚ニ趣クニ方リテヤ、決シテ舊來ノ税法ヲ墨守シ、一度定メタルモノハ之ヲ變更スヘカラスト云フカ如キコトハ到底アリ得ヘカラサルコトナリ。又租税ノ法律ヲ變更シ或ハ新ニ租税ヲ設クルトスルモ、是レ必スシモ毎ネニ人民ノ産業ヲ妨害スルモノナリト斷言スルコト能ハス。縱シ多少妨害スルトスルモ、畢竟程度論タルニ過キサルナリ。

以上ノ理由ニ依リ、おだむすみすノ租税ハ確實ナラサルヘカラスト云ヘリシ原則モ、實際ニ於テハ殆ト行ヒ得ヘカラサルモノトナレリ。凡ソ租税中地租ハ最モ變更スルヲ不可トシ、其ノ他多ク財産ニ課スル租税、例ヘハ家屋或ハ公

債等ニ課スルモノモ亦然リ。然ルニ我國ノ實際ニ徴スルニ執レモ皆度度ノ變更ヲ經サルハナシ。是レヲ見テモ亦以テおだむすみすノ原則ノ強行スヘカラスト所以ヲ知ルニ足ラン。

第四節 第三ノ原則ノ批評

第三ノ原則ハ縦合ヒ租税ハ同一ナルモ將々又税額ハ同シキモ納税ノ時期方法ノ異ナルニ從ヒ、負擔ノ輕重難易ニ關スル感覺ヲ異ニスルヲ以テ、豫メテ納税者ノ爲メニ都合好キヤウ、工夫シ且選擇セサルヘカラスト云フニ在リ。是レ應ニ當然ノ事ニ屬スルモ、若シ一步ヲ進メテ細カニ之ヲ考フルトキハ亦殆ト實行シ能ハサルヲ知ルニ難カラサルヘシ。先ツ原則論トシテ之ヲ考フルニ、元來納税者ノ爲メニ便利ノ租税ナルモノナシ。總テノ租税ハ納税者ノ爲メニ不便ナリ、何トナレハ、金錢ノ犧牲ハ凡テ人ノ欲スル所ニ非サレハナリ。姑ク一步ヲ譲リテおだむすみすノ説ヲ好意的ニ解釋センニ、蓋シ氏ハ納税者カ租税

ヲ納付シ又ハ負擔スルニ方リ、其ノ囊中餘裕ノ存スルモノアルトキハ容易ニ且喜ンテ之ヲ納付スルコトヲ得ヘキモ、之ニ反シテ其ノ空乏ヲ感スル場合ニ徵收セラルルトキハ、縱令ヒ擔稅力アル者ト雖モ、猶大ナル不便苦痛ヲ忍ンテ之ヲ納付負擔スルハ事實ナリ、故ニ當局者ハ努メテ一般納稅者ニ餘裕アル時期ヲ撰ンテ徵收スル方針ヲ採ルヘシト云フノ意ナラン。此說タルヤ、單リ租稅ノ原則トシテノミナラス、あだむす並ニ其ノ餘流ヲ汲メル英吉利派ノ經濟學者ノ學說ノ一信條ニシテ、其ノ然ル所以ノモノハ他ナシ。彼等ハ惟ヘラク、一國ノ經濟政策上最モ注意ヲ拂フヘキハ資本ノ増殖ニシテ、若シ資本ニシテ増殖センカ、國威モ亦自カラ宣揚スヘク、之ニ反シテ資本ノ缺乏スルヤ、國民モ亦自カラ衰亡スヘシ、故ニ經濟政策上力メテ保護獎勵セサルヘカラサルハ一ニ資本又ハ國富ノ増殖ナリト、此ノ說タル、要スルニ第三原則ノ基礎ト爲リシモノナリ、即チ資本ノ増殖說ノ爲メニ此ノ原則ハ鑄造セラレ、而シテ此ノ原則アルカ爲メニ資本家ハ負擔ヲ免レタル例ナキニシモアラス。如上ノ理ニ基キ

從來學者ノ所謂納稅者ニ便利ナル租稅トハ元ト生産ノ終リニ課スル租稅ヲ意味シ、之ニ反シテ、納稅者ニ不便ナル租稅トハ生産ノ始ニ於テ課スル租稅ヲ意味セリ。何トナレハ若シ生産ノ始ニ於テ課稅センカ、資本家ハ止ムナク生産ノ爲メニ用意シタル資本ノ一部分ヲ以テ租稅ノ支拂ニ充ツルカ故ニ、勢ヒ生産ノ規模ヲ縮小スヘク、然ルニ一旦生産ノ結了シタル後、其得タル利益又ハ所得ヲ以テ租稅ニ充テンニハ、資本家タル納稅者ハ容易ニ之ヲ納付負擔シ得ヘケレハナリ。此ノ說ノ行ハルルニ方リテヤ、學者及ヒ實際家ハ頻リニ消費稅ヲ主張シ、遂ニ歐洲諸國ノ租稅制度例ヘハ佛蘭西、獨逸、和蘭、伊太利等ノ如キハ比較的の下層ノ人民ニ課スルニ重キ間稅ヲ以テシ、其ノ極國民ノ不平ヲ招キ甚シキハ内亂ヲ惹起シタルコトスアラキ、千八百四十五年ノ頃獨逸ニ於テ憲法問題上ノ擾擾ヲ生シタルトキ、其ノ一口實トナリシハ從來ノ間接稅ナリ。始ラクみるノ說ヲ借リ來リテ之ヲ説明センニ、凡テ貯蓄又ハ生産資金及ヒ財產ニ課稅スルハ不可ナリ、何トナレハ貯蓄或ハ財產ニ課スレハ、一國ノ資本

ヲ減殺スルコトトナリ、匪勉努力以テ財産ヲ増殖スル者ヲ罰スル結果ヲ生スレハナリ、實ニヤ貯蓄者ヲ税スルハ浪費者又ハ遊蕩者ヲ保護獎勵スルコトト爲ルヘシ之ニ反シテ、消費ノ場合ニ於テ課税スルハ最モ適當ナリ、何トナレハ將ニ雲散霧消スルモノトセハ、國庫カ其ノ幾分ヲ收納スルモ不可ナキノミナラス、消費ヲ税スルノ結果ハ課税ヲ免レン爲メニ消費ヲ控フル者ヲ生シ、終ニハ貯蓄ヲ獎勵スルコトト爲レハナリト、是レ永ク歐米ノ人心ヲ支配セシ一説ナリ。

然ルニ額ヲ之ヲ一般ノ趨勢ニ徵スルニ、國民ニ對スル租税ノ負擔ハ、益々重カラントシツツアリ、サレハ現今ニ於テハ最早納税者ノ便不便ヲ問フノ邊ナキノミナラス、各國ニ於ケル租税立法ノ精神ハ、寧ろ資本家財産家ノ負擔ヲ増加セントスル趨向ヲ呈シ、縱令ヒ生産ノ始ニ於テモ猶ホ課税スルコトヲ躊躇セタルカ如シ、斯クテ生産ノ始メ若クハ終リトカ、或ハ納税者ノ便、不便孰レヲ採ルヘキヤ、之ヲ選擇シ得ル餘地アルニ方リテヤ、勿論納税者ニ便利ナル租税ヲ

採ルヘキハ政治道徳ノ命スル所ナリト雖モ原則トシテ之ヲ強ヒ、常ニ之ニ遵據セシメント欲スルハ吾人其ノ可ナル所以ヲ知ラサルナリ。

尙ホ序ニ我國ノ租税徵收時期ニ付テ一言スル所アラン、我會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリテ翌年三月三十一日ニ終ル、而シテ政府ノ支出ハ年度ノ始メ既ニ六、七、八、九月ノ交割合ニ多キニ反シ、收入ハ却テ年度ノ下半期ニ入ル頃即チ十一月以後ニ多シ、サレハ支出徒ラニ多クシテ收入之ニ伴ハス、爲メニ常ニ大藏省證券ヲ發行シテ國庫ハ之ニ對スル利子ヲ負擔セサルヘカラサルノミナラス、金融市場ニ影響スル所少カラス、果シテ然ラハ何カ故ニ斯クノ如ク歳出入ノ不均衡ヲ閑假スルヤ、云フ迄モナク納税者ノ便利ヲ計ルニ在ルノミ、先ツ地租ニ就テ之ヲ見ルニ、收穫アリシ後ニ非スンハ、地主或ハ農民ハ納税ニ困難ナリ、故ニ田租ハ十二月ニ至リテ、始メテ第一期ヲ徵收ス。

酒税ニ至リテモ之ト同様ニシテ、酒ノ釀造ハ多ク冬期ノ寒中ニ行ハルルヲ以テ、酒税ハ其ノ釀造又ハ仕込以後ニ於テ始メテ賦課徵收スルヲ見ル、其ノ他

ノ租税ニ付テモ大抵皆然リ。

第五節 第四ノ原則ノ批評

終リニ第四ノ原則トシテ、あだむすハ徴收費ノ少ナキヲ以テ租税ノ要道ト見做セリ。此ノ原則モ亦一理アルニ似タリ、但シ實際論トシテ予輩ハ殆ト其ノ價值ナカラントヲ恐ル。凡ソ經濟上ノ事業トシテハ收入少ナク經費多キモノヲ是認スヘカラサルハ明白ノ事ナリト雖モ、收入多キト同時ニ經費モ亦多ク、而モ猶實際ニ適當ナル事業少カラストス、租税ニ付テモ亦然リ。我國ノ酒税ノ如キ、關稅ノ如キ、縱令ヒ收納費ハ割合ニ多キモ、其ノ收入ノ額モ亦多キヲ以テ畢竟ハ國庫ノ利益ニ歸スヘシ。彼ノ專賣ノ益金ノ如キ、國有鐵道ノ收益ノ如キ亦然リ、其ノ經營費ハ多大ニシテ或ハ殆ント收入ノ半ハヲ占ムルコトアラン、併シ縱令ヒ半ハヲ占メタリトテ其ノ殘ル所ノ純收入多大ナルヲ以テ、國庫ニ取リテハ一良財源タルヲ失ハサルナリ。是レヲ以テ、徴收費ハ成ルヘク

節約スルコトヲ努メサルヘカラスト云フハ不可ナキモ、人若シ徴稅費ノ多キ租税ハ之ヲ排斥スヘシ、其ノ少ナキモノヲ採用スヘシト云ハハ是レ事務ヲ知ラサル徒ノ言タランノミ。

尙ホ具體的ノ例ヲ以テ之ヲ説明センカ、例ヘハ茲ニ一萬圓ノ收入アル租税アリ、而シテ其ノ徴收費ヲ十圓ト假定セハ此ノ租税ノ徴收費ハ僅カニ千分ノ一二過キス、然ルニ茲ニ又一億圓ノ收入アル租税アリ、而シテ此ノ收入ヲ得ル爲メニ年々五千萬圓ノ收納費ヲ要スルモノトセハ、其ノ收納費ハ恰カモ二分ノ一二該ル、若シあだむすノ第四ノ原則ヲシテ絕對ニ遵奉スヘキモノナリトセハ、千分ノ一ノ徴收費ヲ以テ足ル一萬圓ノ租税ハ一億圓ノ租税ニ比シヨリヨク良税ナリト云ハサルヘカラスト、然ルニ國庫ノ都合上、縱令ヒ五割ノ收納費ヲ要スルモ猶五千萬圓ノ純收入アルニ若カサランヤ、故ニ收納費ハ出來ルタケ節減セサルヘカラスト雖モ、單ニ收納費ノ多少ヲ以テ租税ヲ選擇スルノ規矩ト爲スハ不可ナリト謂ハサルヲ得ス、畢竟あだむすノ原則ハ、其ノ

聲ノ大ナルニ似ス實際ニ影響スル所少カリシハ事物ノ實際關係ヲ忽視セシカ故ナリ。

併シ此ノ原則中、最モ影響ノアリシハ第三ノ原則ナリ。例ヘハ我國ノ租稅徵收期限ノ如キ多クハ此ノ原則ノ適用ト見ルモ可ナリ。

以上ハ我輩ノ管見ナリ、或ハ多少酷評ノ誅リアランモ、而モ之ニ依リテ以テあたむ、すみすノ所謂四大原則ノ實際上ニ於ケル價值ヲ推知スルニ足ラン。

第六節 結論

斯クノ如ク租稅ノ原則、殊ニあたむ、すみすノ租稅ノ四大原則ハ不完全ナルコトヲ免レス。然レトモ一度ヒ學術界ヲ風靡シテ、其ノ人心ニ浸潤セルコト久シキカ爲メニ學者、實際家共ニ容易ニ之ヲ放擲セス、謂ハハ因襲ノ久シキ相傳ヘテ今日ニ及ヘリ。但シ其ノ不完全ナルカ爲メニ嘗テあたむ、すみすノ主張セシ所ヲ其ノ儘ニ繼承セル者ハ至テ少ナシ。或ハ此ノ原則ノ數ヲ減スル者アリ

或ハ之カ増加ヲ圖ル者アリ。例ヘハ財政學者トシテ有名ナル伯林大學教授、ウーグ故ノ如キハ其數ヲ増シテ九原則ト爲セルニ反シ、埃太利ぶらーグ大學教授タリシざつくすノ如キハ、唯一道義ノ原則ヲ以テ足レリト爲セリ。以テ租稅ノ原則ニ關スル諸學者ノ説カ一定セサルコトヲ知ルニ足ルヘシ。去レハトテ租稅ノ原則ヲ以テ全ク不必要ナリト主張セル者ナシ。蓋シ此ノ原則ハ其ノ實租稅ニ關スル根本的ノ原理ニ外ナラサルカ故ナリ。加之純然タル學理ニ從ヒ租稅ノ得失ヲ判斷スルハ時弊ヲ矯ムル上ニ於テ補益スル所少カラサルノミナラス、寧ロ大ニ望ムヘキノ事柄ナリ。唯々惜ムニ實際ニ於ケル政治經濟上ノ利害關係ハ、理論ニ比シテ常ニ重キヲ爲スハ世上ノ通弊タルコトヲ、凡ソ政治上、社會上、經濟上勢力ヲ有セル階級ノ利害關係其ノ主ト爲リテ以テ、實際問題ヲ解釋スル例甚タ多シ。サレハ租稅ノ是非得失及ヒ實施ノ可否ヲ決スルハ理論ヨリモ寧ロ實際ニ於ケル利害關係ニ依ルコト多シ。元來人ハ皆利己心ノ爲メニ左右セララルルヲ免レスシテ、當局者又ハ立法者ト雖モ亦此ノ數ニ漏レ

ス。彼等ハ努メテ其ノ已レニ不便ナル租税ヲ避ケ、却テ他ノ階級ヲシテ代リテ負擔スル所アラシメンコトヲ圖ルモノナリ。例ヘハ佛蘭西共和國ノ如キ、彼ノ王政並ニ帝政ノ覆滅以來、自由平等ヲ以テ其ノ主義綱領トナスニ拘ハラズ、其ノ財政殊ニ租税制度上ニ於ケル施設ハ、多クハ政權ヲ握レル平民ノ富有者ノ手ニ成リ、從テ平民ノ富有者ニ不便ナル租税ヲ避ケ、貴族又ハ下層ノ人民ノ負擔トナルモノヲ採用セル例少カラサルハ事實ノ證スル所ニシテ、現ニ今ニ至ルマテ未タ眞正ナル所得税ヲ施行セサルヲ以テモ知ラル。然ルニ茲ニ一ノ例外トモ認ムヘキハ英吉利ノ議院政治ナリ。英國ノ政治家ハ古來能ク國家ノ爲メ又一般公衆ノ利益ノ爲メニ、政治上重モナル勢力ヲ占ムル階級ノ利益ヲ犧牲ニ供シ、以テ經營施設ヲ圖リタル例甚タ多シ。是レ洵ニ英國ノ政治史ヲ飾ル一大美事ニシテ、近時英國政界ノ大問題タリシ上院改革案ニ對スル貴族ノ態度ノ如キ眞ニ賞讃スルニ餘リアリ。

第十八章 擔稅力及ヒ眞正ノ稅源

第一節 擔稅力ハ稅減ニ依リテ同シカラス

租税ノ負擔ヲシテ公平ナラシメントセハ、勢ヒ之ヲ人民ノ擔稅力ニ適應セシムルト共ニ、更ニ又課税ノ眞正ノ稅源ヲ捕捉セサルヘカラス。然ラハ納稅者ノ擔稅力ハ果シテ何處ニ存スルヤ、又眞正ノ稅源ハ如何ニシテ之ヲ捉ヘ得ヘキヤ、是レ寔ニ至難ノ問題ト云ハサルヲ得ス。古來租税ノ負擔ヲシテ直接ニ擔稅力ニ適應セシメ或ハ間接ノ方法ニ依リテ眞正ノ稅源ヲ見出サント圖リタル實例頗ル多シ。例ヘハ租税ニ由リテ稅率ノ高低ヲ異ニスルカ如キハ、間接ニ納稅者ノ擔稅力ニ應セシメンカ爲メニシテ、種々ノ課税ノ目的物又ハ標準ヲ採用スルカ如キハ共ニ眞正ノ稅源ヲ捉ヘントスル直接ノ方法ニ外ナラス。眞正ノ稅源ヲ捉ヘ得レハ又直チニ眞正ノ擔稅力ヲ發見スルコトヲ得ヘシ、二者相異レリト雖モ、其ノ實ニ至テハ即チ一ナリ。更ニ之ヲ説明センカ、凡ソ租税中

客體ノ増減スルニ從ヒ稅率ノ不同ナルハ所得稅ニ若クハナシ、其ノ現行稅率ハ所得額ノ千分ノ二十ヨリ五分五厘ニ上ホル、之ニ反シテ、地租ノ稅率ハ嘗テ地價ノ二分五厘ナリシカ一時三分三厘トナリ、復ヒ二分五厘ニ復シ、日露戰役ノ際五分五厘ニ増加シ、現今ハ四分七厘ニ止マル。我國ニ於テハ國稅トシテノ家屋稅ナシト雖モ國ニ依リテハ其ノ貸賃價格ノ五分ヲ課スルアリ、以テ知ルヘシ、諸稅ノ負擔ハ各々異ナレリト雖モ其ノ歸スル所ハ負擔ノ公平ヲ期スルニ在リ之ヲ異ニスルハ總テ實際ノ負擔ヲ公正ナラシメントスルニ在ルコトヲ近世ニ於ケル人頭稅、如キ貴族、士族、平民各一人ニツキ其ノ負擔額ヲ異ニスルハ等シク之カ爲メニシテ、夫ノ平民ノ負擔最モ低ク、貴族ノ負擔最重キ所以ハ前者ハ最モ貧シク後者ハ最モ富メリト假定セラレタルカ故ノミ、斯ノ如ク、古ヘハ直接ニ負擔力ヲ捉ヘントセシテ、唯外觀ニ現ハレタル事實ヲ捉ヘテ以テ之ヲ考量シ間接ニ之ヲ發見セントセシト雖モ、爾後經濟ト政治及ヒ收稅手段ノ進步スルニ從ヒ、直接ニ負擔力或ハ稅源ヲ見出サント圖ルニ至レリ。

茲ニ於テカ、此ノ直接方法ノ如何ナルモノナルカヲ說カサルヘカラス。

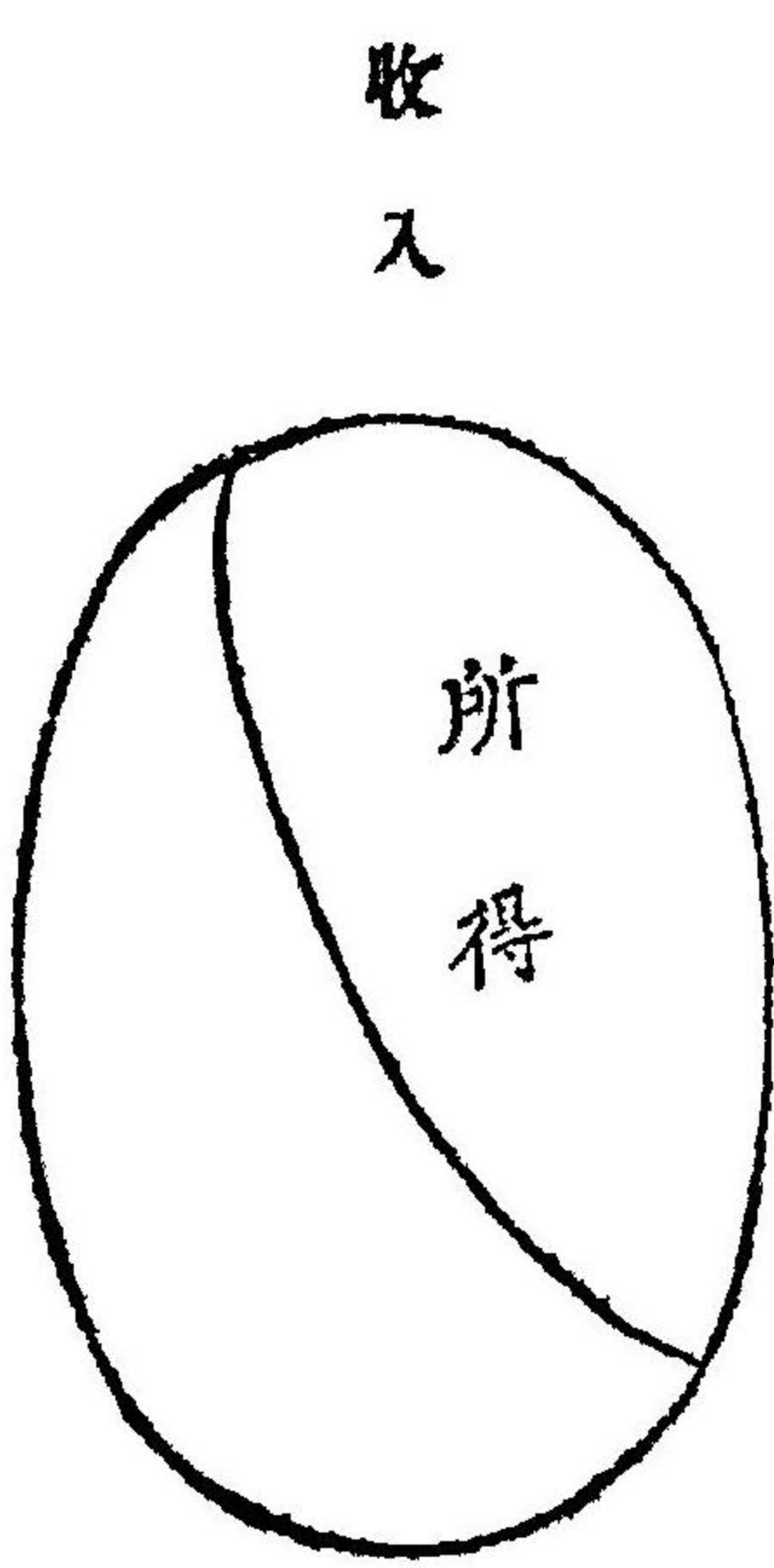
納稅者ノ負擔力ヲ測ル手段中、何レカ最モ適當ナリヤト云フニ、何人モ純所得ヲ以テ之ニ答フルニ躊躇セサルヘシ、然ラハ純所得トハ何ソ念フニ財政及ヒ經濟上屢々用ヒラルル術語ニシテ相類似セルモノ少カラス、收入、所得、收益ノ如キハ最モ適切ナル例ナリトス、元來我國ノ法律上又財政學上未タ此ノ三者ハ判然ト區別セラレザリシカ、寧ロ實際上漸次其ノ意義ノ一定セントスル傾アルハ我意ヲ得タルモノト云フヘキナリ。

然リ而シテ所得ノ中ニ又純所得ト總所得トノ別アリ、凡ソ個人ノ懐ニ遣入ツテ來ル所得ハ即チ總所得ニシテ、其ノ中ヨリ之ヲ得ルニ必要ナル費用ヲ控除シタルモノハ即チ純所得ナリ、茲ニ聊カ以上三觀念ノ關係ヲ畧說シテ、財源或ハ稅源ノ何タルヤヲ理解スルニ資セン。

第二節 收入、所得及ヒ收益

荷一且經濟主体ノ占有ニ歸スルモノハ其ノ理由ノ如何ヲ問ハス何レモ皆例ヘハ他ヨリ借入レタル貨幣物品ト雖モ亦時トシテ收入タルヲ妨ケサルカ如シ然レトモ收入ハ悉ク所得ト云フヲ得ス收入ニシテ所得タルモノアリ又然ラサルモノアルモ所得ハ皆收入ナリ然ラハ所得トハ何ソ子輩ハ暫ラク左ノ如ク定義セントス曰ク所得トハ一定ノ期間ニ規則正シク取得セラレル收入ニシテ其ノ取得者ノ利益ノ爲メニ隨意ニ處分シ得ラルモノナリト依是見之所得ノ觀念ヲ構成スルニハ二箇ノ條件アリ即チ一ハ規則正シク取得セラレルコト及ヒ二ハ之ヲ取得シタル者カ己レノ利益ノ爲メニ自由ニ處分スルコトヲ得ル收入タルコト是レナリ人若シ所得稅ヲ賦課セラレル收入ヲ見ハ皆如上ノ性質ヲ有スルモノタルヲ知ルニ足ラン例ヘハ官吏ノ俸給ニ對シテハ悉ク所得稅ヲ課ス何トナレハ毎月或ハ毎年規則正シク取得セラレルカ故ナリ然ルニ土地ノ收穫ニ對シテハ其ノ總テニ所得稅ヲ課セス先ツ第一ニ其ノ土地ノ收穫ヨリ地租其ノ他ノ公課ヲ控除ス是レ總令ヒ土地所有者カ

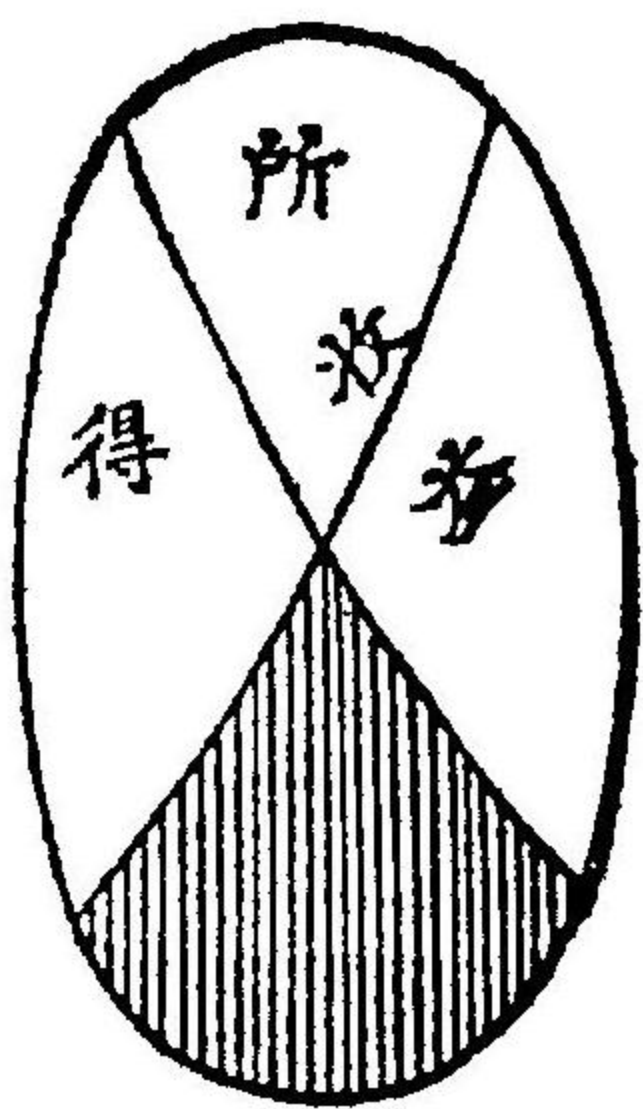
其ノ所有地ヨリ得タルモノナリト雖モ公課ニ對スル部分ハ土地所有者ノ自由處分ヲ許ササルカ故ニ當然除外セラルヘカラサレハナリ果シテ然ラハ所得ハ收入ノ一部分ニシテ圖ヲ以テ示ストキハ左ノ如クナラン



然ラハ收益トハ何ソヤ曰ク收益トハ一定ノ期間ニ於テ或物件ヨリ生スル收入ナリトサレハ官吏ノ勤務或ハ勞働者ノ勞役等ニ據リテ以テ得ル所ノ收入ハ收益ニ非ス之ニ反シ土地ノ收穫ノ如キ家屋ノ賃貸料ノ如キ地代ノ如キ公債ノ利子ノ如キ皆收益ナリ何トナレハ其財源タル確固ニシテ又容易ニ消滅セサル物件タルヲ以テナリ左ニ收入所得及ヒ收益ノ關係ヲ圖示セン


總稅力及ヒ真正ノ稅源 收入、所得及ヒ收益

收入



斯クノ如ク一部分ニ於テ所得ト収益トハ相重複スルコトアルモ、又然ラサル部分モアリ、其ノ収益ニシテ而カモ所得ニ非サルモノヲ例示セハ、茲ニ未丁年者ノ爲メニ土地或ハ其ノ他ノ財産ヲ管理スル者アリトセンニ、其ノ管理者ノカ彼等ノ土地財産ヨリ年年收穫スル所ノ物ハ収益ナリト雖モ、ソハ管理者ノ利益ノ爲メニ自由ニ使用スルコト能ハサルカ故ニ其ノ所得ト稱スルコトヲ得ス、又所得ニシテ収益ニ非サルモノヲ舉クレハ、官吏ノ俸給ノ如キハ其ノ一例ナリ、何トナレハ俸給ハ官吏ノ勤勞ニ由リテ得ルモノナレハナリ、抑、勞働トカ勤勞トカ稱スルモノハ勤勞ヲ呈供スル際ニ於テノミ存スル財源ニシテ、土地家屋ノ如ク基本的固定ノ財源アリテ永ク存在スルニアラス。

此ノ理由ニ由リ地租ノ如キハ比較的重課スルモ不可ナルコトナシ、何トナレハ基本的ノ財源永續的ニ存在シ、其ノ所有者ハ設令將來ノ謀ヲ爲ササルモ直ニ放浪ノ藪ニ遇ハサルヘシト雖モ、單ニ俸給又ハ勞銀ニ由リ衣食スル者ハ唯其ノ之ヲ得ル間ノミ財源ヲ有ルカ故ニ、將來ノ謀ヲ爲スノ必用上比較的其ノ負擔ヲ軽減セサルヘカラスト云フ結論ヲ生ス。

次ニ右圖中  印ヲ以テ現サレタル部分ハ収益所得ノ孰レニモ屬セスト雖モ、等シク租稅或ハ稅源ト密接ナル關係ヲ有ス、試ミニ此中ニ含まルモノ著シキ例ヲ舉ケンニ相續財產若クハ財產等ノ價格ノ騰貴ニ因ル富ノ増殖ナリトス、先ニ與ヘタル定義ニ據レハ、相續財產ハ所得ニモアラス、收益ニモアラズ、又彼ノ臺灣ノ彩票、將タ權利株ノ騰貴等ヨリ得ル收入ハ等シク所得及ヒ收益ニ非ス、而モ斯クノ如キハ經濟ノ進歩著シキ時代ニ當リ頻頻トシテ生スル事實ニシテ、土地價格ノ自然増加ノ如キ所得ニ非ス、等シク収益トモ云フヘカラス、予輩ハ假リニ之ヲ稱シテ一時ノ利得ト稱スルノ穩當ナルヲ信セントス。

第三節 純所得ト税源

前述セル所ヲ以テ見ルニ、租税ヲ納付スルニハ常ニ收穫アルコトヲ要ス、然レトモ收入アレハトテ直ニ之ヲ以テ税源ト爲シ、以テ納税者ノ擔税力ヲ計ル標準ト爲スコト能ハス、其ノ最モ完全ナルモノト見做スヘキ純所得ト雖モ、必スシモ常ニ納税者ノ擔税力ヲ現ハスモノニアラス、換言スレハ、擔税力ト純所得トハ相一致セス、故ニあだむ、すみすカ説キタル如ク、純所得ヲ認メテ以テ直チニ税源ノ存スル所トナスハ、早計ニ失スルヲ免レスシテ、純所得ハ寧ロ課税ノ一標準ニ過キス、是レヲ以テ直正ノ擔税力又ハ税源ヲ見出サントセハ勢ヒ純所得ニ就テ多少ノ斟酌制限ヲ加フルコトヲ要ス、而シテ其ノ斟酌スヘキ重モノナル事情ハ左ノ知シ。

一、生活ノ必要費、全然同一義ニアラサルモ、英語ニテ之ヲ「Minimum of existence」ト云フ、獨佛ニ於テモ亦同シ、此ノ生活ノ最少費トハ、社會ニ於ケル普通一

般ノ人カ普通ノ程度ヲ以テ生活スルニ必要ナル費用ナリト解シテ可ナリ、若シ吾人ノ所得ニシテ生活ノ必要費ノ爲メニ吸收シ盡サレンカ、綜合ヒ純所得ニシテ存スルモ、其ノ擔税力ハ甚タ弱シ、此ノ理由ニ基キ、所得取得者ノ家族ノ數、年齡、健康ノ状態、負債ノ有無等ハ皆以テ擔税力ヲ定ムル要件タリ、各國ノ所得税法ニ據ルニ、其ノ類等シカラスト雖モ、皆一定ノ小所得ニ對シテ減免ノ特典ヲ設ケサルモノナキハ、此ノ理ニ依ル、例ヘハ、我國ニテハ三百圓以下ノ所得ニ對シテハ所得税ヲ課セス、又普魯西ニテハ四百五十圓、さくそにー王國ニテハ二百圓、うゆるてんべるひ王國ニテハ二百五十圓、埃太利ニテハ五百圓、和蘭ニテハ五百四十圓、諾威ニテハ八百八十圓、瑞西ニテハ二百八十圓迄ノ所得ニハ各所得税ヲ課セス、丁抹ニテハ特別ノ制度ヲ採リ全國一様ナラス、地方ニ依リテ異ナリ、例ヘハ、資本家多キ都會ト資本家少ナキ田舎トハ經濟事情ヲ異ニスルヲ以テ其ノ額ヲ異ニシ、三百三十圓、三百九十圓及ヒ四百四十圓ヲ以テ各最低額トセリ、西班牙ニ於テハ官吏ト非官吏ト別ニシ、官吏ハ三百十圓、官吏ニ

アラサル者ハ四百五十圓ヲ以テ最低額ト爲セリ。以上ハ所得ニ付テノミ適用セラレ得ヘキモノニシテ、収益或ハ一時的ノ利得等其ノ他間接ノ方法ニ由リ擔稅力及ヒ稅源ヲ見出サントスル場合ニ於テハ之ヲ適用スルノ餘地ナシ。

二、所得ヲ得ル資格及ヒ條件、個人ノ所得ハ、綜合ヒ其ノ金額ハ同額ナリトスルモ、擔稅力ニ差異アルハ上述セル種々ノ事情ニ徴シテ明カナルノミナラス、正確ノ所得額ヲ調査スルハ容易ノ業ニアラス。擔稅力ノ差異ハ所得者ノ經濟上ノ地位若クハ關係等ニ由ルコト多ク、之ヲ細論スレハ左ノ如シ。

(イ) 所得ヲ取得スル能力ニ制限アル者ト、制限ナキ者トノ間ニ於テ別アリ。例ヘハ寡婦孤兒ノ所得ノ如キハ壯年有爲ノ者ニ比シテ、其ノ之ヲ取得スル能力ニ劣レル所アルハ云フヲ俟タス。

(ロ) 少額ノ所得ハ實際ノ擔稅力ニ乏シ、富メル者ハ倍倍富ミ易ク、貧シキ者彌彌貧シキハ現時ノ經濟界ニ於ケル一部ノ現象ナリ。故ニ貧者ノ所得ハ富者ノソレニ比シ稅源トシテ同一視スルコト能ハス。彼ノ獨逸連邦ノ一タルバ!

でん大公國ニ於テハ、婦人又ハ小兒ノ所得カ五百麻即チ二百五十圓以下ナルトキハ、所得稅ヲ免除スル特例ヲ設ク。

(ハ) 是レニ反シテ、實際所得ナキモ尙ホ之ヲ生シ得ヘキ資格ヲ存スルモノハ良好ナル稅源ト爲スニ足ル。例ヘハ富豪ノ別莊庭園等ノ如シ。

三、綜合ヒ所得ハ同額ナリトスルモ其ノ擔稅力ニ差異アル所以ハ他ナシ、其ノ之ヲ得ルニ當リ、危險ノ多キモノト少ナキモノト、之ヲ得ルニ確實ナルモノト不確實ナルモノトハ實際ノ負擔力ニ於テ決シテ一樣ナルコト能ハサレハナリ。是レヲ以テ英國ノ如キハ生命保險ノ懸金ヲ所謂生活ノ必要費ト同一視シテ所得稅ヲ課セサルナリ。加之所得中其ノ性質永遠的ノモノト一時的ノモノトハ、擔稅力ヲ同フセス。若シ所得ニシテ單ニ一時的ノ性質ヲ具ヘ、年々變動スルコトアラシカ、容易ニ課稅ノ目的物トスルコト能ハサルヘシ。斯ル場合ニ於テハ數年ノ間ニ亘ル平均額ヲ以テ課程ノ目的物トナササルヘカラス。勞働者所得ノ如キハ其ノ例ナリ。此ノ理由ヨリシテ地方稅例ヘハ府縣市町村稅ニ